

[Baby Don't Cry]

登場人物表

柚木 つぐみ (6) (31) ……図書館司書

柚木 翔平 (31) ……つぐみの夫

広川 直子 (28) ……つぐみの職場の後輩

富田 多喜男 (29) ……常連の図書館利用者

斎藤 愛梨 (6) ……幼稚園児

若村 すみれ (31) ……つぐみの母

柚木 陽介 (27) ……翔平の弟

柚木 満里奈 (24) ……陽介の妻

○レディスクリニック・待合スペース（朝）

清潔で広々とした院内。30〜40代の女性達で埋め尽くされている。

図書館司書の柚木つぐみ（31）が椅子に腰かけ、小説を読んでいる。

ピンポーンと音が鳴る。

上部にあるモニターを見上げる、つぐみと女性達。

『52 内診室3』と表示されている。

つぐみ、ポケットから受付票を取り出し、自分の番号を確認すると、席を立つ。

○内診室（朝）

薄暗い個室。診察椅子と超音波モニター、カゴが置いてある。

つぐみ、ジーンズとショーツを脱いでカゴに入れると、診察椅子に座る。

目の前はカーテンで仕切られている。向こう側から、医師達が行き来している

音が聞こえてくる。

看護師の声「準備できましたか？」

つぐみ「はい」

看護師の声「椅子が上がります」

足を広げて仰向けになるつぐみ。

医師の声「お名前を確認させて下さい」

つぐみ「柚木つぐみです」

○タイトル「Baby Don't Cry」

○西新宿のオフィス街

高層ビルが立ち並んでいる。

スーツ姿の人々が行き交う中、携帯を片手に足早に歩いているつぐみ。

つぐみ「3時間休で申請してたんですが、半

休にしてもよろしいでしょうか？：はい、

1時には着きます。急に申し訳ございません。
ん。失礼します」

頭を下げながら電話を切る。

と、鞆から手紙を取り出し、すぐ横にある郵便ポストに投函する。

つぐみ、走り出す。

○中央線が走っている

○武蔵野図書館・一般開架コーナー

書架が連なる静かな館内。

利用者が本を選んだり読んだりしている。

図書館職員の広川直子（28）が梯子に

登り、書架の高い位置にある一般書を整

理している。

直子「あっ、まただ」

と、一冊の絵本を見つけて手に取る。

つぐみの声「直ちゃん」

直子、振り向くと、下からブックトラッ

クを運んでいるつぐみが見上げている。

直子「つぐみさん、お疲れ様です」

つぐみ「ごめんね。午前中、カウンター一人

にして」

直子「全然大丈夫ですよ。今日、結構ヒマ」

つぐみ「（言いにくそうに）あのさ、来週の火

曜、直ちゃん遅番なんだけど、早番と代わ
れたりする？」

直子「いいですよ」

つぐみ「ほんと？予定確認してからでも」

直子「ないから。予定なんて」

つぐみ「…ありがとう」

つぐみ、直子が持っている絵本に気づく。

つぐみ「それ、絵本？」

センダックの『かいじゅうたちのいると
ころ』である。

直子「最近、整架してると絵本が出てきて」

つぐみ「何それ」

直子「出てきません？」

つぐみ「出てこない」

直子「誰かに恨まれてるのかなあ？」

つぐみ「…（真剣に）天沢くんかも」

直子「え…誰？」

つぐみ『耳をすませば』だよ！ほら、本好き
の女の子に片思いしててさ」

直子「…先に本読んでアピールしてた男の

子？」

大笑いするつぐみと直子。

近くにいた利用者達の視線が集まる。

つぐみ、そそくさとその場を去ろうとすると、斎藤愛梨（6）がつぐみ達の方を見て立っている。

つぐみ「お母さん探し：（てるの？）」

愛梨、逃げるように走り出す。

つぐみ「えっ、ちよっと！」

つぐみ、追いかけてようとすると、男性にぶつかる。

富田「おい」

常連の利用者である、富田多喜男（29）が怖い顔で立っている。

つぐみ「申し訳ございません！」

富田「俺のことか？」

つぐみ「は？」

「ピンポンパンポン」と、館内放送が流れる。

館内放送「利用者の皆様へお知らせ致します。

最近、置き引きが発生しております。所持品は手元から離さぬようご注意ください」

富田「俺が席立つと流れんだよ。証拠でもあ
んのか？」

つぐみ「いえ、これは自動音声で所定の時刻
になると流れるようになっておりまして」
富田をなだめるつぐみ。

○マンション・エントランス（夜）

単身、二人暮らし向けのマンション。
買い物袋を提げて入ってくる、つぐみ。
郵便受けを開け、広告と一通の手紙を取
ると、エレベーターの中へ入っていく。

○自宅・ダイニング（夜）

1DKの狭い部屋。
台所で料理をしているつぐみ。
ガチャッとドアが開く音がする。
と、夫の柚木翔平（31）が入ってくる。

翔平「ただいま」

つぐみ「あれ？おかえり。早かったね」

翔平「直帰したー。もう疲れたし」

つぐみ「そうだね、それがいいよ」

翔平、ネクタイを緩めながら椅子に座り、

翔平「病院、どうだった？」

つぐみ「うん、ちゃんとしてそうだった」

翔平「そっか。やっぱり体外受精の専門のと

こに変えて正解だったな」

つぐみ「だね」

つぐみが包丁を動かす音が響く。

翔平「今後、どういう感じなの？」

つぐみ「排卵はできてるから、とりあえず自

然サイクルでやりましょうって」

翔平「自然：？」

つぐみ「自然サイクル。排卵誘発剤は使わな

い方法のこと。自力で卵育てて、排卵直前

に取り出すの」

翔平「そんで受精させて、子宮に戻すのか」

つぐみ「すごい。詳しいね」

翔平「バカにして。仕事、平気そう？」

つぐみ「うーん。長引かなければ、何とかな
りそう。かな」

翔平「大丈夫だよ」

つぐみ「うん」

翔平「すぐ妊娠するよ」

つぐみ「…だね！」

つぐみ、翔平の方へ振り返る。

と、封が開いていたササゲの袋に手が当
たり、大量のササゲがこぼれ落ちる。

つぐみ・翔平「わーっ！！」

二人、かがんでササゲを集めながら、

つぐみ「おしゃべりしないで、はやく拾わな
きゃね」

翔平「お前がこぼしたんだろ！しかも、なん

で赤飯なんだよ！めでたくもないのに」

つぐみ「いいの！食べたかったの！」

楽しそうにササゲを集める二人。

○レディスクリニック・待合スペース（朝）

診察を待つ女性達で埋め尽くされている。

ピンポーンと音が鳴る。

上部にあるモニターを見上げる、つぐみと女性達。

『34 診察室2』と表示されている。
つぐみ、席を立つ。

○ 診察室（朝）

医師とつぐみが向かい合っている。

つぐみ「卵子が、育ってないんですか」

医師「少し卵胞の発育を促したいので、排卵誘発剤を打って卵巣を刺激させますね」

つぐみ「はい」

医師「3日後に様子を診て、うまくいけばそこで採卵日を決められるかもしれませんが」
つぐみ「よろしくお願いします」

○ 自宅・ダイニング（夜）

時計は0時を過ぎている。

テーブルで手紙を書いているつぐみ。

テーブルの上に写真が2枚飾られている。

1枚はつぐみと翔平のツーショット。
もう1枚は制服姿のつぐみと祖父母。

ドアが開き、翔平が入ってくる。

つぐみ、驚いてビクツとする。

翔平「なんだ、起きてたの」

つぐみ「あ、ごはん食べる？」

つぐみ、手紙を隠すようにテーブルの隅へ追いやり、急いで台所へ向かう。

翔平、手紙に目をやり、

翔平「お義母さんに手紙書いてたの？」

つぐみ、答えずに料理を温めている。

翔平「なんだかんだで仲いいよな」

つぐみ「別に」

翔平「小学生の頃からずっとだろ？俺は無理

だわ」

つぐみ「ただの習慣だから」

翔平「一回くらい会ってみたいけどな」

つぐみ「(きっぱりと)合わす顔ないでしょ」

翔平、まずったという顔をして、

翔平「(わざと明るく)あのさ、日曜大丈夫そ

う？結婚式、陽介の」

つぐみ「そうだ！銀行、行かなきゃ。あー、

私、病院だから直接行くね」

翔平「ごめんな、こんな時に」

つぐみ「お義父様とお義母様は前泊するの？」

翔平「それがさ、なんか嫁さんがマリッジブ

ルーっつうの？そういう感じらしくて」

つぐみ「えっ、そうなの？」

翔平「なんか、式の打ち合わせ中とか、泣き

出したりするんだとさ」

つぐみ「そう」

翔平「で、心配だから明日会いに行くとか言

ってて」

つぐみ「…私達、式挙げなかったからね」

翔平「あんま余計なことすんなって言っとい

たけど」

つぐみ、無言で料理をテーブルに置く。

○武蔵野図書館・児童コーナー

何組かの親子が本を読んだりしている。

カウンターに座っているつぐみと直子。

絵本の表紙をガーゼで拭いている。

つぐみ「最近、”天沢君”はどう？」

直子「相変わらずです」

つぐみ「そう」

直子「どんな人なんだろ」

つぐみ「（直子を見て）…！」

直子「センスいいんですよ。絵本の」

つぐみ「ねえ！来月のおはなし会さ、天沢君が挟んできた絵本読まない？こっちからも

気づいてますよって、何かメッセージを…」

直子「ダメです。安西水丸にするから」

と、拭いていた安西水丸の絵本『りんごりんごりんごりんごりんご』を満足そうに眺める。

つぐみ「仕事と趣味は分けないと」

直子「自分でしょ！」

つぐみ「私は直ちゃんのためにと、文句の一

つも言わず…」

直子「頼んでない！頼んでない！」

富田の声「おい」

つぐみ・直子「申し訳ありません！」

つぐみと直子が正面を向くと、富田が立っている。

富田「このこの図書館、ろくな絵本ねえな。誰が選んでんだよ」

直子「は？何なんですか、あなた。いつも」
つぐみ、ふと、書架で絵本を選んでいる。
愛梨が目に入る。と、カウンターを出る。
直子と富田、言い争いを続けている。

○児童コーナーの書架

愛梨、屈んでセンダックの『かいじゅうたちのいるところ』を読んでいる。

つぐみ、愛梨の後ろに立ち、

つぐみ「センダックが好きなの？」

愛梨「（振り向いて）…」

つぐみ「この間も見てたね」

愛梨、絵本を持って走り出す。

つぐみ「待って！私はなにも」

つぐみ、追いかけてようとする、絨毯に足をとられて転ぶ。

愛梨「（振り返って）…！」

つぐみ「痛たたた…」

愛梨「だいじょうぶ？」

顔を上げるつぐみ。

愛梨が目の前に立っている。

○児童コーナーのおはなしの部屋

つぐみと愛梨が並んで座っている。

キャラクターの絆創膏を膝に貼るつぐみ。

つぐみ「ありがとう」

絵本を抱えたまま、何も答えない愛梨。

つぐみ「それ、おもしろいよね。マックス」

愛梨「…よんだの？」

つぐみ「うん」

愛梨「おとななの？」

つぐみ「うん、絵本好きだから」

愛梨「どうして？」

つぐみ「絵本には光があるから」

愛梨「ひかり？」

つぐみ「私には、世の中とか人間はいいもの
だっていう明るさが必要なの」

愛梨「…」

つぐみ「愛梨ちゃんは絵本好き？」

愛梨「きらい」

つぐみ「じゃあ、何で読んでいるの？」

愛梨「ママはあかちゃんのおせわでいそがし
いの」

つぐみ「(愛梨を見て)…」

つまらなさそうに足を揺らしている愛梨。

つぐみ「…私がママだったら、絶対こんな思
いさせないのに」

愛梨「(驚いて)…え？」

つぐみ「(我に返って)やだっ！ごめん、おば
さん、変なこと言っちゃった。やだやだ」

愛梨「おばさんじゃないよ」

つぐみ「え…？」

愛梨、にこっと笑う。

つぐみ「ありがとう」

つぐみもつられて笑顔になる。

○披露宴会場（日替わり）

翔平の弟の柚木陽介（27）と花嫁の満里奈（24）が、ひな壇で友人達と盛り上がっている。傍からは、マリッジブルーだった人には見えない。

翔平の両親は忙しそうにテーブルを回り、ゲスト達にビールを注いでいる。

親族のテーブルで料理を食べている、つぐみ、翔平、親族達。

叔母「イマイチ」

翔平「はは」

叔母「立派な式場なのに。料理にはお金かけなかったのかしらねえ」

翔平「どうなんですかね」

叔母「素敵なドレスだこと」

つぐみ、ひな壇の満里奈に目をやる。

ピンク色の華やかなドレスをまとっている満里奈。カメラマンに向かって、少し

顔を傾け、バツチリ表情を決めている。

叔母「もう三年目だっけ？こっちの方は？」

と、手でお腹を摩るしぐさをする。

翔平「どうなんですかね」

叔母「若いうちに産んどいた方がいいわよ」

ぎこちない笑顔を作るつぐみ。

司会者のアナウンスが聞こえてくる。

司会者「それでは、ここでご両親への感謝の

気持ちを込め、新婦・満里奈さんが今日の

日を迎えるにあたり、お書きになった手紙

を自らお読みになります」

ひな壇の下に立っている陽介と満里奈。

陽介がマイクを持ち、満里奈が手紙を読

み始める。

満里奈「パパ、ママ、産んでくれて育ててく

れてありがとう。パパとは友達みたいに仲

が良くて、いつも冗談ばかり言って。そ

れをママが突っ込んで：」

泣き出す満里奈。陽介が背中を摩る。

翔平の両親がもらい泣きをしている。

叔母「あ、ワイン頂ける？」

と、ウェイターに話しかける。

満里奈「私がいつかママになった時は、うち

みたいに仲がよくて楽しい家庭に……」

つぐみ、ひな壇の方を見ている。

○レディスクリニック・受付（朝）

診療受付時間前のため、人気のない院内。

つぐみ「8時10分に予約した柚木です」

受付係「おはようございます。柚木様ですね。

本日は採卵で、旦那様は……」

つぐみ「仕事なので。これ」

と、鞆から容器（精子が入っている）を

取り出し、渡す。

受付係「それでは、お名前でお呼び致します

ので、手前のソファでお待ちください」

つぐみ「はい」

ソファの方へ行くつぐみ。

女性とスーツ姿の男性が座っている。

つぐみ、二人から離れたところに座る。

看護師の声「高橋さん」

男性「大丈夫だから。リラックスね」

女性「うん」

つぐみ「…」

○オペ室の前（朝）

手術着姿のつぐみが、一人で座っている。

オペ室のドアが開く。

看護師「柚木さん、どうぞ」

○オペ室（朝）

薄暗いオペ室に入るつぐみ。

手術着姿の医師と何人かの看護師がいる。

看護師「お名前を確認させて下さい」

つぐみ「柚木つぐみです」

看護師「それではこちらの台に座って下さい」

つぐみ、手術台へ近づき、腰を掛ける。

看護師「背中をつけて、そう、寝る感じで」

看護師の手に促されながら、台の上で仰

向けになるつぐみ。

暗い天井をじっと見る。

○武蔵野図書館・受付カウンター（日替わり）

賑わっている館内。

何人かの利用客が受付に並んでいる。

つぐみに対応している。

つぐみ「11月23日までです」

と、利用者Aに本を渡す。

つぐみ「次の方、どうぞ」

つぐみ、専用端末で、利用者Bの本のバ

ーコードを次々と読み取っていく。

利用者C、少し離れた自動貸出機から、

利用者C「すいませーん！これ、読み取らな

いんですけど」

つぐみ「少々お待ち下さーい！」

忙しく立ち回るつぐみ。

○自宅・玄関（朝）

靴を履いているつぐみ。

ダイニングのドアが開き、パジャマ姿の

翔平が出てくる。

つぐみ「あ、ごめん。起こしちゃった？」

翔平「（眠そうに）いや」

つぐみ「テーブルの上にごはんあるから」

翔平「病院？早くない？」

つぐみ「一番に受付したいから。仕事だし」

翔平「今日だっけ？結果、分かるの」

つぐみ「うん」

翔平「大丈夫だから。どっちに転んでも」

つぐみ「うん。じゃ、行ってきます」

と、出ていく。扉が閉まる。

翔平、あくびをして部屋へ戻っていく。

○レディースクリニック・待合スペース（朝）

診察を待つ女性達で埋め尽くされている。

両手を握り、椅子に座っているつぐみ。

ピンポーンと音が鳴る。

つぐみ、モニターを見上げる。

『1 診察室1』と表示されている。

○ 診察室 1 の前（朝）

緊張しながらドアをノックするつぐみ。

つぐみ「失礼します」

と、ドアを開ける。

医師と看護師が座っている。

その表情は硬い。

○ マンション・エントランス（夜）

買い物袋を提げて入ってくるつぐみ。

郵便受けを開け、広告と一通の手紙を取ると、エレベーターの中へ入っていく。

○ 自宅・ダイニング（夜）

一人でカレーを食べているつぐみ。

つぐみ「おいし」

スプーンとお皿が当たる音だけが響く。

○ 西新宿のオフィス街（朝）

サラリーマン達が足早に通勤している。

ポストの前に立っているつぐみ。

一通の手紙を靴から取り出すと投函し、
とぼとぼ歩き始める。

○レディスクリニック・診察室（朝）

医師と向かい合っているつぐみ。

医師「ちゃんと新しい卵胞が育ってきていま
すよ。また三日後に経過を診みましょう」
つぐみ「よろしくお願いします」

○忙しい日々を送るつぐみ（モニタージユ）

図書館の受付にいるつぐみと直子。

言い合う直子と富田をなだめるつぐみ。

夜、自宅のベランダで洗濯物を取り込んで
いるつぐみ。

レディスクリニックの診察室で医師と向
かい合っているつぐみ。医師の話を真剣
に聞きながら聞いている。

×

×

×

夜、閉館後の誰もいない事務室で、パソコンに向かって、脇目も振らず入力しているつぐみ。

×

×

×

レディースクリニックで看護師から注射をされているつぐみ。針が入る瞬間に痛そうな表情になる。

×

×

×

中央線の車内で、食べかけのパンを片手に寝ているつぐみ。

○レディースクリニック・診察室（朝）

医師と向かい合っているつぐみ。

医師「では明後日、来て下さい。順調だったらそこで採卵日を決められると思います」
つぐみ「：よろしくお願いします」

つぐみの表情は疲れている。

○武蔵野図書館・職員用休憩室

時計が13時を指している。

休憩に入ったつぐみと同僚職員がロッカーの前で話している。

同僚職員「えっ、明後日？選書リストの入力しようと思ってたんですけど」

つぐみ「すみません、急に。大丈夫です」

休憩終わりの直子が入ってくる。自分のロッカーを開け、職員用エプロンを出す。

同僚職員「あー…でも、がんばれば明日終わるか。いいですよ、代わっても」

つぐみ「本当ですか？申し訳ありません」

同僚職員「主任に言っといて下さいね」

つぐみ「はい」

同僚職員が財布を持って出ていく。

つぐみ、自分のロッカーからコンビ二袋を取り出し、椅子に座る。

直子「シフトなら代わるのに」

エプロン姿の直子が立っている。

つぐみ「…直ちゃんには、もう何回も代わってもらってるから」

直子「そんなの」

主任の声「広川さん！整架ー！」

直子、心配そうにつぐみを一瞥すると、
急いで休憩室を出ていく。

つぐみ、だらんとテーブルに突っ伏する。
と、雨音が聞こえてくる。

目を閉じるつぐみ。

○道（回想）

雨が降っている人通りの少ない歩道。

つぐみ（6）と母親の若村すみれ（31）
が傘をさして歩いている。

『めだかのがっこう』を歌うつぐみ。

つぐみのかえる柄の長靴が、ご機嫌そう
に歩を進めている。

対照的に、すみれのハイヒールは、無機
的な音を響かせている。

つぐみ「ついたー！じじとばばのおうち」

○武蔵野図書館・職員用休憩室

主任の声「柚木さん…柚木さん！」

つぐみ、目を覚ます。

と、目の前に主任が立っている。

主任「休憩時間、過ぎてるわよ」

時計を見ると14時を過ぎている。

つぐみ「すみません！すぐ行きます」

つぐみ、慌てて立ち上がると、

主任「柚木さん、具合でも悪いの？」

つぐみ「え？」

主任「：プライベートなことに口出したくな

いけど、通院してたりするなら、ちゃんと

係長に話した方がいいわよ」

つぐみ「：」

主任「事情が分かってくればこっちも対応でき

るから。やっぱり急にシフトの変更頼まれ

ても困るのよ。ぎりぎりの人数なんだし」

つぐみ「：申し訳ございません」

つぐみ、頭を下げると足早に出ていく。

○一般開架コーナー

ブックトラックを運んでいるつぐみ。

目の前で、大きなお腹を抱えた妊婦が本を選んでいる。

つぐみ「(妊婦を見て)…」

つぐみ、避けるように通り過ぎる。

と、書架と書架の間に愛梨が立っている。

つぐみ「愛梨ちゃん？」

書架を見上げている愛梨。振り向いて、

愛梨「あ、おねえちゃん」

つぐみ「どうしたの？何か探してるの？」

愛梨「『まどそのそのそのまたむこう』」

つぐみ「センダック？ここに絵本はないよ」

愛梨「あるよ」

つぐみ「え？」

愛梨「あそこ」

と、奥の書架の上の方を指す。

つぐみ、愛梨が指す先を見る。

つぐみ「(驚いて)…！」

富田が梯子の上に立っている。

『まどそのそのそのまたむこう』を一般

書の間挟み込もうとしている。

つぐみ「（思わず）と、富田さん」

富田「ん…？（下を見て）」

富田、つぐみと目が合う。

次の瞬間、逃げ出そうとし、

富田「わっ！」

梯子から足を踏み外す富田。

つぐみ「危ないっ！」

つぐみ、梯子の下に駆け寄る。

両手を広げ、富田を受け止めるようにして倒れるつぐみ。

愛梨「おねえちゃん！」

ドーンと大きな音が響き、本がバラバラと落ちる。

近くで整架をしていた直子が駆けつけ、

直子「つぐみさん！大丈夫！」

と、言いかけたところで固まる。

つぐみ「痛っ…富田さん大丈夫ですか？」

つぐみ、起き上がろうとする。

と、自分の手にカツラが握られている。

横で倒れている富田に視線を移す。

つぐみ「(驚愕して) …！」

富田の頭部の中心に髪の毛がない。

富田「ううん」

意識を取り戻し、起き上がる富田。

つぐみ、直子、愛梨が富田を見ている。

富田「…？」

富田、つぐみの手元にあるカツラを見る。

富田「ハッ…！」

富田、素早く両手を頭頂部に当てると、

直子の方を見る。

富田を見ている直子。

色を失っていく富田。

富田「わあああー！」

と、慌てふためきながら走り去る。

啞然とするつぐみ、直子、愛梨。

直子「何あの、アイツ。人騒がせな」

つぐみ「(思い詰めた表情)…」

直子「大丈夫？つぐみさん」

つぐみ「どうしよう」

直子「え？」

つぐみ「富田さん：もう来ないかも」

直子「来なくていいよ。別に」

つぐみ「私のせいで：」

明らかに狼狽しているつぐみ。

直子「つぐみさん？」

つぐみ「隠してたのに：多分：必死で」

直子「カツラくらいでそんな」

つぐみ、まるで自分のことのように、

つぐみ「隠してたんだよ！」

直子「どうでもいいですよ」

つぐみ「え：？」

直子「そんな小さなこと」

驚いて直子を見るつぐみ。

直子「別に隠さなくてもいいのに」

直子、落ちている一般書を拾い始める。

その中から絵本を見つけて、

直子「あれ？これ、あなたの？」

と、愛梨に手渡す。

つぐみ「隠さなくても：いい？だったら：私

は：」

と、眩き、立ち尽くすつぐみ。

○自宅・ダイニング（夜）

台所で料理をしているつぐみ。

翔平が入ってくる。

翔平「ただいま」

つぐみ「おかえり」

翔平「今日は？どうだった？」

つぐみ「普通」

翔平「そか」

料理を続けるつぐみ。

翔平「…」

ネクタイを取りながら椅子に腰かける翔

平。悩ましい表情でつぐみの様子を伺う。

つぐみ「お金、用意してもらっていい？」

翔平「えっ、あ、お金？何で？」

つぐみ「もうすぐ採卵だから」

翔平「ああ、そかそか。いくら？」

つぐみ「30万」

翔平「分かった。明日、下ろしてくる」

翔平、一瞬ためらうが、思い切って、

翔平「あ…のさ、今度の正月なんだけど」

つぐみ「うん」

翔平「今日、お袋から電話があって」

つぐみ「うん」

翔平「今年は陽介達もいるわけなんだけどさ」

つぐみ「うん」

翔平「それが、その」

つぐみ「…」

翔平「あー」

つぐみ「妊娠した？」

翔平「え？」

つぐみ「妊娠したの？奥さん」

翔平、わざと明るく、

翔平「当たり前ー！すごいね！こういうのは

やっぱり女性の方が分かるのかなあ。俺な

んか驚いちゃって。え？もう？なんつって、

笑っちゃって…」

翔平、つぐみの包丁を持つ手が止まって

いることに気づく。

つぐみ「笑えない」

翔平「…」

つぐみ「全然笑えない」

翔平、つぐみの横に駆け寄り、

翔平「ごめん！だから俺、今うちはこういう状況でって。実は不妊治療してて、だから今回は別々で行かせてほしいって、言ったんだよ。だけど」

つぐみ「…」

翔平「親父が、先越されたからって、そのの大きく構えてりやいいんだとか言い出して」

つぐみ「…」

翔平「これから、どっちが先に家買ったとか、どっちの子供がいい学校入ったとか、その度に、来るの来ないのやってたらキリないって。まあ、確かに言ってることは正しいんだけど。全然分かってないっていうか」

つぐみ「私は」

つぐみの手が震えている。

つぐみ「分からないけど、ひよっとしたら」

翔平、つぐみの迫力に押されて黙る。

つぐみ「一生、子供を持つことができないか

もしれないの」

翔平「分かってる。分かってるよ、ごめ……」

つぐみ、涙が溢れ出し、感情が爆発する。

つぐみ「ふざけないでよ！あの子がマリッジ

ブル―だなんだって騒いでた時はオロオロ

してたくせに、私には何？わがまま言うな

って？随分冷静じゃない」

翔平「ごめん」

つぐみ「結婚したくないならしなきゃいいで

しょ！私は産みたいのに産めないの！」

翔平「だから今年に行かなくていいよ。少し

ほっとこう。あっちも悪気はないんだよ」

つぐみ「……悪気がなかったら何してもいいわ

け？」

翔平「そういう事じゃなくて。うちの親だっ

て子供が独立して、寂しさもあるんだよ。

楽しみにしてるだけなんだよ、正月を」

つぐみ「楽しかったら何でもいいんだ」

翔平「（ため息をついて）想像つかないんだ

よ、普通の人は。不妊治療つつつても、分
からないんだよ」

つぐみ「翔ちゃんだって分かってないよ」

翔平「分かってるよ」

つぐみ「分かってない！私は翔ちゃんの家を
満足させるために生きてる訳じゃない！」

翔平「いい加減にしろよ！」

つぐみ、ビクツとする。

翔平「人の親のことそんな風に言うなよ」

つぐみ「…」

翔平「頭冷やしてくる」

と、部屋を出ていく。

つぐみ、独りぼっちで泣く。

○自宅・寝室（朝）

雨音が聞こえる。

一人でベッドで寝ているつぐみ。

玄関の扉が閉まる音がする。

目が覚めるつぐみ。顔が赤い。
雨音に耳をすましていると、ゆっくり瞼
が落ちていく。

○マンション・エントランス（夜）

スーツ姿の翔平が傘を閉じて入ってくる。
郵便受けを開け、広告と一通の手紙を取
る。手紙の宛名を見て、

翔平「（驚く）…」

○自宅・ダイニング（夜）

電気がついてない薄暗い部屋。
つぐみが一心不乱にテーブルで手紙を書
いている。

翔平がドアを開け、入ってくる。

つぐみ、ビクツとなる。

翔平「これ」

と、手紙をつぐみに差し出す。

つぐみ「（手紙を見て）…」

母親に送った北海道の住所当ての手紙。

封筒の上部に「あて所に尋ねあたりませ
ん」と、赤い印が押してある。
つぐみ、手紙を受け取るとテーブルに置
き、平静と続きを書き始める。

翔平「…それ」

手紙を書き続けるつぐみ。

翔平「返事きたことあるの？」

つぐみ、手を止める。翔平の方を向き、

つぐみ「…ない」

悲しそうに微笑むつぐみ。

ゆっくりと立ち上がり、部屋を出ていく。

ガチャン、と玄関の扉が閉まる音がする。

立ち尽くす翔平。

○公園（夜）

雨がポツポツとわずかに降っている。

つぐみ、誰もいない公園でブランコに座
り、頼りなく揺られている。

誰かが走ってくる音がする。

息を切らした翔平、つぐみの前で止まる。

翔平「すみませんでした」

と、深く頭を下げる。

つぐみ「私、雨好きなんだ」

翔平、頭を上げる。

つぐみ「雨の日は、お母さんがいるから」

翔平「（訳が分からず）…？」

つぐみ「夜はお店行ってていないの。だから、一人で絵本を読むんだけど、雨の日はいるの」

翔平「…」

つぐみ「お母さん、雨嫌いだから。ハイヒールが汚れるからって」

翔平、つぐみの言葉を待つ。

つぐみ「あの日も、雨だったなあ」

○道（回想）

前の回想シーンの続き。

祖父母の家の前に着いたつぐみと、その後ろに立っているすみれ。

つぐみ「ついたー！じじとばばのおうち」

すみれの返事がない。

つぐみ「(振り返って) …?」

すみれが寂しそうに微笑んでいる。

つぐみ「はいらないの?」

すみれ「うん」

つぐみ「なんで?」

すみれ「ママね、今よりもーっといい仕事見

つけたの。ママ頑張っちゃうから、だから、

少しの間だけ、つぐみもいい子にさせてね」

つぐみ「…どこにいくの?」

すみれ「北海道。少しだけ遠いところ」

つぐみ、不安そうにすみれを見つめる。

すみれ「手紙を書いて、毎週必ず。ママも書

く。そうすれば、いつも一緒だから」

すみれ、小指をつぐみに差し出す。

すみれ「(にっこり笑って) 約束ね」

つぐみ「うん」

と、すみれの指に小指を絡める。

その時、ふと、すみれの後方に立って

る男の姿がつぐみの目に入る。

キャリーバックを持った男。吸っていた
たばこを地面に捨て、踏みつぶす。

○公園（夜）

つぐみ、ブランコに座ったまま、力なく
前を見ている。

つぐみ「なんで私は選ばれないんだろう」

翔平「…」

つぐみ「不妊治療やめる」

つぐみ、翔平の方を向いて

つぐみ「ごめんね。色々迷惑かけて」

翔平、つぐみを抱きしめる。

翔平「もう一度、一緒に頑張らせて下さい」

つぐみ「…」

○夜空

雲で月が陰っている。

○夏の空（9か月後）

セミの鳴き声が響いている。

夏の太陽が、強い光を照らしている。

○武蔵野図書館・外観

夏服を着た人が図書館の前を通り過ぎる。
看板に「蔵書点検のため、9月9日～1
5日まで休館」と書かれている。

○一般開架コーナー

職員達が、あちこちの書架で次々と本の
バーコードを読み取っている。

○児童コーナー

低い書架が並んでいる。
床に膝をついて絵本を取り出し、バーコ
ードを読み取っているつぐみ。
お腹がふっくらしている。

直子の声「つぐみさん！」

つぐみ、振り返ると直子がバーコードリ
ーダーを持って立っている。

直子「手伝います」

つぐみ「わーありがとう」

直子「大丈夫？腰つらくない？」

つぐみ「全然平気。児童書にしてもらって助かってる」

直子「大型本ですよ、私なんて」

つぐみ「尊敬しちゃう」

直子「ホントですよ」

つぐみ、直子に顔を近づけじーっと見る。

直子「え：何？」

つぐみ「尊敬のまなざし」

直子「バカじゃないの」

大笑いする二人。

○本屋（夕方）

たくさんの人で賑わっている店内。

『女の子の名前辞典』を手取るつぐみ。

店員の声「これより、オキタタミト先生のサイン会を開催します！整理券をお持ちの方は、こちらの特設コーナーに番号順でお並び下さい」

整理券を手にした人達が、ぞろぞろと特設コーナーに並んでいく。

店員の声「オキタ先生は、『パインおうじのぎやくしゅう』で第29回絵本大賞を受賞され、今、最も注目されている期待の新人作家でいらっしゃると思います。ぜひ、この機会をお楽しみ下さい」

拍手が沸き上がる。

つぐみ、ひよっこり特設コーナーを覗く。

つぐみ「(驚いて)…！」

アフロ頭の富田が、男の子にサインをしている。

言葉が出ないつぐみ。

富田、笑顔で男の子と握手をする。

男の子が横にいる母親にサイン色紙を見せ、嬉しそうに飛び上がる。

つぐみ、優しい表情になる。

○自宅・ダイニング(夜)

テーブルで『女の子の名前辞典』を開き、

紙に候補を書いているつぐみ。

翔平の声「引っ越しやめにしない？」

つぐみ「えー？なんで？」

つぐみ、台所の方を見る。

翔平が料理を作っている。

翔平「医者に安静にしろって、言われたんだろ？」

つぐみ「平気だよ。張り止めの薬もらったし」

翔平「なあ、仕事休めないの？俺、明日から中国だよ」

つぐみ「無理だよ！だって、来週から産休入るんだよ？これ以上迷惑かけられないよ」

翔平「じゃあ、せめて引っ越しは産まれてからにしようぜ。何かあったら俺はもう…」

つぐみ「（小声で）意外と過保護なタイプ？」

突然、目の前に大皿に乗ったオムライスが置かれる。イマイチな見た目である。

翔平「（バツが悪そうに）どうぞ」

つぐみ「…すごい巨大だね。しかも、夜ご飯にオムライス単品って」

翔平「悪かったな！これでも野菜たくさん入れたり、栄養面のことを考えて！」

つぐみ「分かったよ」

翔平「何様なんだよ、お前は！」

楽しそうにオムライスを食べる二人。

○自宅・玄関（朝）

靴ひもを結んでいる翔平。

つぐみ、後ろに立っている。

つぐみ「忘れものない？」

翔平「うん。（紐が結び終わり）よし」

と、立ち上がる。

翔平「じゃ、何かあったらすぐ連絡しろよ」

つぐみ「はい」

翔平、扉を開けようとして、

翔平「あ、お土産何が欲しい？」

つぐみ「え、じゃあ…パンダの人形」

翔平「ベタだな」

つぐみ「赤ちゃんにだよ」

翔平「分かってるよ！」

つぐみ「あはは」

翔平「じゃあ、行ってくるわ」

つぐみ「行ってらっしゃーい」

ガチャンと扉が閉まる。

つぐみ「ママも頑張らなきゃ」

と、お腹を摩りながら部屋へ戻っていく。

○武蔵野図書館・児童コーナー

床にぺったり腰を下ろし、だるそうに絵

本のバーコードを読み取っているつぐみ。

つぐみ「ふう…」

つぐみ、手を止めてお腹を摩る。

周りを見ると、職員達が忙しそうに動き

回っている。

直子「不明本、見つかりましたー！」

主任「おー！広川、よくやった！」

つぐみ、再びバーコードを読み取り出す。

○職員用休憩室（夕方）

ロッカーの前で着替えを終えたつぐみ。

お腹を摩り、よろよると椅子に座る。

直子「間に合ったー！よかった」

直子が走って入ってくる。

つぐみ「直ちゃん」

直子「これ。今日でつぐみさんとするの最後

だから」

と、かわいく包装された袋を差し出す。

つぐみ「えっ、ありがとう！開けていい？」

直子「どうぞ」

つぐみ、袋を開けると、りんごが刺繍されたスタイが出てくる。

つぐみ「…かわいい」

直子「手作りだから微妙ですけど、よかったら使ってください」

つぐみ「ありがとう。直ちゃんには迷惑ばかりかけちゃって。本当にありがとう」

直子「また来年、待ってます」

つぐみ「あの、私も渡したいものがあって」

直子「えっ、そんな」

つぐみ「これ」

と、鞆から絵本を出して渡す。

『パインおうじのぎゃくしゅう』である。

直子「あっ、これ絵本大賞とったやつじゃな

いですか！気になってたんですよ」

つぐみ「そうなんじゃないかと思って」

直子「さすがつぐみさん！」

つぐみ「：そのうち、この本もどこかに挟ま

ってるかもね」

はしゃぐ直子を見て、笑顔になるつぐみ。

○帰り道（夕方）

真っ赤な夕焼けが綺麗というより、怖い。

だるそうに歩いているつぐみ。

立ち止まってお腹を摩る。歩き始めるが、

つぐみ「痛っ：」

と、腹部に痛みを感じ、目の前にあるバ

ス停の椅子に倒れこむ。

バスを待っている男性がつぐみを見る。

男性「大丈夫ですか？」

つぐみ「すみません」

と、起き上がろうとした瞬間、

つぐみ「痛い……！！」

強烈な腹痛をきたし、地面に転げ落ちる。

男性「だ、大丈夫ですかっ！」

救急車のサイレン音が重なる。

○産婦人科・診察室（夕方）

診察椅子に仰向けになっているつぐみ。

医師が険しい表情で、エコーの画像を見ている。

医師「痛みはどんな感じですか？」

つぐみ「重い生理痛のような……」

医師「いつからですか？」

つぐみ「朝から、少しだるかったです」

医師、横にいる看護師に何かを告げ、席を外す。

看護師「こっちのベッドに移りますね」

つぐみ、看護師に抱えられ、よろよると隣のベッドに移る。

看護師「赤ちゃんの心拍を確認しますね」

と、つぐみのお腹に装置を取り付ける。
「ドクン、ドクン」と赤ちゃんの心臓の
音が聞こえてくる。

つぐみ「…」

医師が戻ってくる。

医師「（看護師に向かって）どう？」

看護師「心音、低いです。正常の半分くらい」

つぐみ、看護師の方を見る。

医師、つぐみに向かって努めて穏やかに

医師「常位胎盤早期剥離を起こしています」

つぐみ「え？」

医師「普通は分娩後に剥がれるはずの胎盤が
すでに剥がれかかっている、赤ちゃんに酸
素が行きにくくなっている状態です」

呆然とするつぐみ。

医師「少し赤ちゃん心配だから、帝王切開し
て取り出してあげましょう」

つぐみ「あの…」

医師「恵林大学の付属病院へ連絡をつけまし
たから、今からそちらへ向かいますよ」

つぐみ「赤ちゃん大丈夫なんですか？」

看護師「柚木さん」

つぐみ「お願いです！助けて下さい！」

取り乱すつぐみをなだめる医師と看護師。

○恵林大学付属病院の廊下（日替わり）

スーツ姿の翔平が必死に走っている。

○新生児集中治療室

車椅子に座っているつぐみ。

目の前には保育器の中でたくさんの方に

繋がれ、眠っている赤ちゃん。

医師と看護師が横にいる。

看護師が保育器を開け、管を取っていく。

その様子をじっと見ているつぐみ。

ドアが開き、翔平が入ってくる。

翔平「何で：何がどうなって」

医師が翔平の元へ歩み寄る。

医師「常位胎盤早期剥離を起こしていました。

奥様の場合、おそらく妊娠中毒症があって、

お腹が張り気味だったところに、急に血圧が上がって起きたのかもしれない」

翔平「あの、それで…」

医師、悲痛な面持ちになり、

医師「これから、少しずつ心臓の動きが遅くなっていくます」

翔平「(愕然として)…」

医師、頭を下げると、その場を離れる。

取り残された翔平、つぐみの方を見る。

つぐみ、看護師から赤ちゃんを受け取っている。

つぐみ「かわいいー。やっと抱けた」

と、無邪気な笑顔で赤ちゃんを抱く。

翔平、つぐみの方へ歩み寄る。

つぐみ「ほら、お父さんが来たよ」

少し小さい女の子の赤ちゃん。

つぐみ「分かるかなあ？」

赤ちゃんは目を閉じている。

すると、赤ちゃんの頬に涙が落ちる。

つぐみ「ほら、泣かないの」

それはつぐみの涙である。

つぐみ「いい子だから」

赤ちゃんは、ただ静かに呼吸をしている。

翔平、優しく赤ちゃんの頬に触れ、

翔平「待っていてくれてありがとうな」

翔平、つぐみと赤ちゃんを抱きしめる。

○中央線の車内（日替わり・夕方）

ドア付近の席に座り、放心状態のつぐみ。

大きなパンダの人形を抱えている。

車内アナウンス「まもなく三鷹ー、三鷹ー」

奥の方から、赤ちゃん連れの親子が言い

合っている声が聞こえてくる。

母親の声「ほら、靴はいて。着くよ」

女の子の声「イヤ」

母親の声「早くしてよ。着いちゃうでしょ！」

赤ちゃんが泣き出す。

無表情のまま、前を向いているつぐみ。

三鷹駅に到着する電車。ドアが開く。

車内のアナウンス「三鷹ー、三鷹ー」

つぐみ、立ち上がる。

つぐみ「…」

しかし、足が前に出ない。

発車音の『めだかのがっこう』が流れる。

赤ちゃん連れの親子がドア付近に来る。

母親は赤ちゃんをおんぶし、右手に大き

な荷物、左手で愛梨を引っ張っている。

抵抗する愛梨。泣き叫ぶ赤ちゃん。

つぐみ「…」

つぐみ、手が届きそうな距離にいる赤ちゃんを見る。

と、赤ちゃんにパンダの人形を向け、人

形の後ろから「ばあ！」と顔を出す。

赤ちゃん「（泣き止んで）…」

キヤツキヤツと笑い出す赤ちゃん。

母親「ありがとうございます」

愛梨「（笑顔になって）あ、おねえちゃん！」

つぐみ、笑顔になる。

（終わり）